

# とっても短いおはなし集



## 恋のおはなし編

eru

## 『星は砂となり、そして消える』

---

今日もいつもの公園で、いつものベンチに座って、他愛もない話をして。

「何、それ」

「どれ？」

赤いの、と私が言ったら、「ああ」と陽司は自分の頭に手をやった

「・・・クラスの奴に、付けられた」

陽司の髪に留まっていたのは、明らかに女物のピンだった

きっと、休み時間に「かわいいよー」なんて言われながら付けられたのだろう

そして、付けたほうも付けられたほうもそのまま忘れてしまったのだ

こういうとき、違う学校の男を彼氏にしたことを後悔する

自分の知らないところで、彼氏が他の女と笑い合っているかと思うと、

ときどきすっごくムカついて、でもそういうのやめてって言っても

監視できるわけじゃない。陽司がどういう日常を過ごしているか知ることはできない

「明日、返さなきゃ」

そう呟く陽司に、焦りとか後ろめたい感じがしなかったから、私は安心した  
もしその女と何かあるなら、少しは慌てるはずだから。

「明日、日曜だよ」

「うわ、めんどくせー。忘れそう・・・」

掌にのせられた赤いピンを見ながら陽司はそう言う

日が暮れてきた。陽司の顔が、翳る

「ねえ、失くしたことにしちゃえば？」

「え、でも・・・」

「それ、多分100円だし」

月曜日まで、陽司はピンを返すことを覚えていなくてはならない

それはつまり、誰だか知らないけれど、その女のことを月曜日まで

頭の片隅に入れておかなければならないことになる

そんなのは嫌だ。だから、私は陽司の手からピンを奪い取って思いっきり投げた

ピンは一番星と重なってから、砂の上に落ちた

「・・・お前なにすんだよ。後で怒られるの、俺なんだからな」

「拾ってくればいいじゃん」

「いいよ面倒臭い」

そう言った陽司に、私は気をよくして、ふふっと笑った

「・・・何笑ってんの？」

「別にー」

赤いピンは、暗闇に紛れて、もう見えなかった

## 『はなむけ』

---

### 『はなむけ』

蝉、風鈴、団扇。夏の風物詩には事欠かないけど、今年の夏は君が欠けてる  
東京の大学に行ってしまった君を追いかける勇気のない僕を、誰か弱虫と呼んでくれ

「行くんだ、マジで」

俺はミカの横顔を見ながら言った。ミカは目を合わせてくれない

「うん、ごめん」

「謝ることないよ。夢のためだろ」

海のないこの県で生まれ育ったのに、ミカは海洋を研究したいらしい  
魚とか、珊瑚とか、よく分からないけれど、すごく好きだよ  
その好きになったきっかけを作ったのは他にもない俺なんだけど。  
初デートに水族館を選んだのが、吉だったのか、凶だったのか。

「海が見えるキャンパスなの。すっごく素敵で……。だから、よかったら  
遊びに来て？案内するし」

ミカの真意が分からない。俺たちはそろそろ、決断を下さなければならないはずだ  
ミカが東京に行くまであと一ヶ月もない。それまでに、遠距離恋愛をするか、  
それとも終わらせるか、選ばなくてはならない

俺は正直、続けていける自信がない

東京にはオシャレな男がいっぱいいるんだろう

ミカも一気に垢抜けて別人のようになってしまうんだろう

都会に染まった彼女を今と同じように愛せるかどうか分からない

だからと言って、別れを切り出せるわけがなかった。俺はまだミカが好きだし。

でもミカは、俺より魚を選んだのだ

きつともう、それほど俺のことを好きでないのかもしれない

だって、第一志望の大学に合格したんだから、ミカの胸は期待でいっぱいのはずだ

田舎の男に縛られずに、都会を満喫したいに違いない

ミカのためを思うなら、別れておくべきだろうか。

「その気になればさ、2時間で帰ってこれるんだって」

「そうなの？」

「便利になったよね」

その言葉には、喜びは感じられない  
別れる理由が一つ減ったと、嘆いているようだ

「ミカ。お前は、どっちがいい？」

「・・・ずるい。私に決めさせるの？」

本当にお互いを好きだったら、例え距離が離れようとも、別れという選択肢はないはずだから、きっと二人の気持ちは同じなんだ

「じゃあ、別れようか」

俺はわざとあっさり言って、ミカのお荷物を一つ減らしてやった

彼女のいない夏なんて悲惨だ。男同士でプールや遊園地には行きたくないし、だからと言って一日中部屋でゲームをするのも悲しい  
ミカとは連絡を取り合っていない。きっと今頃、新しい男と夏を満喫しているのだろう  
あんな狭いところに全国から夢と希望を持ったやつらが殺到してくる  
それにつられて無意味に東京を目指す若者が一体どれくらいいるのだろう  
大学を出たら、俺も上京しようか。特に目的もないけれど。  
きっと俺みたいな中途半端なやつらが東京の人口を増やしているんだ

団扇で扇いだら、ちっとも涼しくない空気が肌に触れた  
夏に、お前は生温いと言われているようだった

強めの風が、吹き抜けていった。ここは屋上だから、砂埃が舞う壁が作る影の中に二人で並んで座っていた

「・・・川野一。私たちって・・・何？」

美希の短い髪と、制服のスカートがひらひらしている  
川野は、一瞬身を硬くしてから、息を吸った

「それは、はっきりしてほしいってこと？」

美希は膝を曲げてその上に顎を乗せた

「・・・うん、そうなのかな。なんか、このまま卒業とか、嫌だから」

二人とも、目を合わせない。視線は定まらず、何も見ていない

「俺は、ずっと逃げてきたから。本当はちゃんとお前に言わなきゃいけないこといっぱいあるのに。ごめんな、ずるくて」

「・・・ううん。私だって、ただ待ってただけだし。自分から動くの怖くて・・・」

なんで今日このタイミングでこんなことを言い出したのか、美希は自分でも分からないでいた  
このまま友達みたいな関係がずるずると続くのもいいかな、なんて思い始めていた  
けど、周りのみんなに恋人ができたりして、だったら自分と川野は一体どんな関係なんだろう  
かとか、男女の友情は成立しないのだろうか、とかいろいろ考えてしまったんだ  
こんなこと言い出したら、川野が困るの分かっているのに。

太陽が真上に昇って、影がなくなってしまった  
日の光が制服の袖に反射して、白さが際立つ。眩しいくらいに。

「俺は、お前のこと好きだよ。友達としてじゃなくて、女として。  
でも、今までそういう気持ちを隠してきたのは、お前が俺のこと好きなのかどうか  
自信がなかったから。俺が好きって言った瞬間に、嫌われたらどうしようって」

本当は、美希が自分の事しか見ていないのも知っていたし、嫌われるわけがないと分かっている  
のだけど、それでも踏み込めないのは、自分が弱いからだとか川野は思っていた

気まずい沈黙が流れていた。今は4時間目で、もうすぐ昼休みだ  
昼休みになってしまえば、屋上に人が来る可能性がある。それまでに、決着をつけなければ。

「付き合おうか。いや、付き合ってください」

川野はぺこりと頭を下げた。そのときちょうど、チャイムが鳴った  
がやがやと階下が騒がしくなった。タイムリミットだ

「・・・私でよければ、お願いします」

チャイムが鳴り終わってから、美希も頭を下げた  
再び沈黙がやってくる。今度は少し幸せな沈黙。  
思ったより、落ち着いてるな、と美希は思った。川野からの告白をずっと待っていたのに、  
いざ言われると、もちろんどキドキはしているのだけど、なんだか心地良いリズムだ

「じゃ、行きますか」

美希はすくっと立ち上がって、スカートの汚れを払った

「先行くねー」

足取り軽やかに屋上を出る。カンカンカン、と音を鳴らして階段を下りる  
今日から私、ちょっとだけ大人だ

一方、川野の心臓は爆発しそうだった

「・・・っ緊張した～～～！」

どっと疲れが襲ってくる。やっと言えた達成感と、緊張から解かれた解放感で、体の力が抜けた

「立てない・・・」

一世一代の告白は見事成功し、川野は晴れて彼女持ちとなった  
学校と言う狭い空間だから、二人の新しい関係はみんなにすぐ広まってしまうだろう  
でもそれはすごく嬉しいことで、これからの毎日が輝くだろう  
勇気を出してよかった、と川野はにんまりした

「でも、なんであいつあんなにさっぱりしてたんだ・・・」

女ってのはよくわからないな、というお決まりのセリフを、今後川野は頻繁に呟くことになる。



## 『手の届かない向こう側』

---

丘の上に立つこのマンションからは、街が一望できる  
民家が不規則に建ち並び、山の向こうには高層ビルの頭が覗いている  
陽が傾き始め、薄暗くなるにつれて灯る街灯。  
完全に日が沈めばこの辺りは真っ暗になる。でも、山の向こう側は夜中でも明るい  
電車で30分ほどで着くその街は、いわゆるネオン街だ  
昼間はサラリーマンで溢れ返り、夜は派手な女が酔っ払っている

「で？用件は？」

冷たい声を受話器から漏れる  
相手は少し苛立っているようで、話を促す

「忙しいのにごめん。でも、声が聞きたくなって・・・  
だって、もう2週間も会ってないんだよ？次はいつ会えるの？」

マンションの窓から遠くに見えるビルを見ながらミナミは言った  
あのビルのどこかに彼はいるはずだ

「わからない。仕事も忙しいし、休日は家族サービスしなきゃならないんだ」

付き合い始めた頃は、極力家族の話題を避けていた彼も、最近は平気で口にするようになった  
それを聞いて、ミナミが傷つくことを知っているのに。

「夜なら、会えるんじゃないの？」

「無理だよ。他にも付き合いとか、いろいろあるし」

「少しでいいの。5分でいいから会おうよ」

「・・・ごめん、時間できたら連絡するから」

彼の声が少し柔らかくなった

ごめんなんて、白々しい。嘘をつくときほど彼は優しくなる

そうすればミナミがほだされると信じているようだ

「俺だって会いたいよ。苦しいのはお前だけじゃないんだ

わかってくれるよな？大人の事情ってやつがあるんだよ・・・」

彼はいつも大人を言い訳にする。子供であるミナミには分からない、と言い聞かせる  
ミナミは、自分はもう子供じゃないと思っていた

でも、経験や口の上手さは彼のほうが何倍も上で、それだけはいつまでも追いつけない  
「愛してるよ、ミナミ」

縋るような、甘えるような、切ない声で彼は言う

その声に何度騙されただろう。彼の一番は私だと、ミナミは信じていた

でも大人になりつつある今、嘘を見抜く術を身に付けてしまった今、  
気づきたくなかった真実から、目を逸らせなくなっている

「よく言えるね、そんなこと。一番にしてくれないなら、愛してるなんて言わないでよ」  
ミナミの目から涙が溢れた

「好きじゃないなら優しくしないで。本気じゃないなら抱かないで・・・」

滲んだ景色が暗くなっていく。ビルの窓には明かりが点いている  
見えているのに、届かないこの距離が、もどかしい

こんなことを言ってしまったら、彼に捨てられるのは分かっていた

素直で従順な少女でなければ、彼は簡単にミナミに興味を失うと分かっていた

だから、ミナミは電話を切っていた。愛してる、と彼が言ったその直後に。  
結局、一番になれなくても、彼を失うよりはマシだった

それほどに彼が好きなのだ。一番気づきたくなかった事実、ミナミは呆然とした  
いつの間にか本気になっていたのだ。若さゆえに燃え上がった一時の恋だと思っていた

「バカだな・・・わたし」

床に転がった携帯電話は無音のまま。彼からの着信が来るのは当分先だろう  
街は闇に包まれ、窓ガラスには大人の女になったミナミが映っていた

## 『人ごみの中の君』

---

「あ、忘れ物・・・」

彼が呟いた。何？と私は聞いた

「財布。さっきのカフェに置いてきたかも」

彼はジーンズのポケットを探りながら記憶を辿っている

「うそっ。早く戻らなきゃ」

「うん、俺行ってくるからここで待ってて」

「私も行くよ」

「いいから」

そう言って、付き合ってから半年になる彼は人ごみの中に消えていった  
隣にあった温もりがさっと薄れる

周りにたくさん人がいるのに、ひどい孤独を感じた

横にいるときはこの世でたった一人の愛しい人なのに

人ごみに紛れると他の人と変わらないただの一人の男。

その男がなぜこんなにも愛しい存在になるのだろうか

髪型も服装も身長も平凡な彼を、人の波の中から見つけるのは難しい

同じく平凡な私を、彼はすぐに見つけてくれるだろうか

早く早く早く。帰ってきて、今すぐに

「あ・・・」

数メートル先に、彼の姿が見えた

彼は私のほうに歩いてくる。わき目も振らずに。

私が立っているのは何の目印もないところなのに

彼には私しか見えていないみたいに、まっすぐ歩いてくる

「ごめん、待たせて」

「ううん」

なんで私のいる場所がすぐに分かったの、なんて聞く意味もないけど。

こんな小さなことがこんなにも嬉しいのは、きっとあなただからだね

## 『情緒不安定男』

---

彼女は時折ため息をつくだけで、何も喋らない  
その横顔は美しく、見惚れてしまうのだが、実は今そんな場合ではない

「・・・なんで？」

俺の口から出たのは、なんとも情けない声だった。でもそれしか言いようがない  
「別れたいの」なんて言われてしまっては。

2年も付き合ったのは今回が初めてで、このままずっとこんな関係が続くんだろうなと  
ぼんやりと思っていた矢先だった。突然の危機的状況。

「なんか、飽きちゃった」

彼女が目を合わせずにそう言う。泣きたい。正直、泣きたい

「それは・・・俺がつまらないってこと？」

恐る恐る聞いてみる。いい答えが返ってくるわけなんてないんだけど。

「そうじゃないけど、最近なんだか毎日同じことの繰り返しのような気がして」  
彼女はわりと感情を表に出さない人で、顔が整っているから余計に、人間味がない  
その綺麗な顔が涙に歪むのも、笑顔でくしゃくしゃになるのも見たことがない  
だから、俺と一緒にいて楽しいのかどうかわからなかった

でも俺はそんな彼女といっても楽しかった。わずかな表情の変化に一喜一憂した

「あなたといると、明日が想像できてしまうの。明日もきっとあなたは私に優しくて、  
私のこと好きだって言って、私を抱きしめるの。

もちろんそれが幸せなことだって分かってるんだけど・・・」

幸せって、続くと人を麻痺させてしまうらしい

そんなこと俺は知らない。誰も教えてくれなかったし、彼女を幸せにするって  
男の使命だと信じてここまで生きてきたのに。

「俺は別れたくないよ。お前のこと好きだし。なにかして欲しいことがあるなら  
言えよ。俺のできることなら何でもやるし」

俺は彼女と違って直情型だ。感情を隠しておくことができない

現に今、彼女と別れたくない一心で、必死に言葉を並べている

いつだって俺の方が先に声を荒げるし、笑うし、泣くし、好きだって言うし、  
かわいって言うし、いつもいつも俺の方が・・・

「それが嫌だって言ってるのよ！」

あれ？今の大きい声は一体誰が発したんだ？もしかしてお前ですか？

「いつも、あんた、私のこと喜ばそうとして、なんでもかんでも一生懸命やって、結局自分が一番楽しんで、私がつまらなそうだとすっごく悲しそうな顔をして・・・  
そういうの、疲れるの。私はあんたの感情の起伏についていけないのよ・・・」

彼女がこんなに吐き出すようにしゃべったのは初めてだ  
俺はびっくりして彼女をただみつめる

「私は、あなたの隣にいらればそれだけでいいのに・・・」  
涙を流しながら、絞り出すように言ったのは、この世で俺にしか聞こえていない言葉。

「そっか。俺、少しがんばりすぎたんだなあ・・・」

俺は彼女の涙を指ですくった

「お前がそんなに俺のこと好きだなんて知らなかったよ」

その言葉に、彼女は耳まで真っ赤にして俯いた

そんな彼女は今まで見た中で一番かわいくて、俺は思わず彼女を抱きしめた  
俺は今まで美人の彼女を繋ぎとめるのに必死だったというのに、  
彼女はしっかり俺に惹き付けられていたらしい  
とんだ取り越し苦労だ。でも、嬉しくて仕方がない

「じゃあ、いつもお前のことばかり考えていた俺が、初めてわがままを言いましょうか？」

俺の言ったことが理解できなくて、彼女は首をかしげた

「ずっと俺の隣にいるよ」

俺の臭すぎるセリフに彼女は大笑いした。まったく、失礼な話だ  
でも、彼女の泣き笑いはなかなか貴重なのでよしとする

## 『君の声』

---

うちの学校の校舎はコの字型で、私の教室の中庭を挟んで向かいにあるのは3-A組だ  
そして私は1-B組で一番窓際の席に座っている。この席になってから約半月。次の席替えが来るのが嫌で仕方がない。なぜなら、ここからはあの人が見えるからだ  
3-A組、一番窓際の前から3番目。いつも窓の外をぼーっと見ている人がいる  
名前も知らないその人は、時々先生に当てられて慌てて窓から目を離す。その様子を見ている私も先生「おい、ぼーっとしない！」と言われる

季節は夏だ。うちのクラスも3-Aも窓は全開。だってクーラーないし。窓2枚分あの人に近づいた気がして、私は一人にやける。彼の横顔は涼しげで、見ているだけでなんだかいい気分だ  
彼がいつも窓の外の何を見ているのかが気になった。私が彼の存在を知ったのはこの席になってからなので彼のことは何も分からない。ただ、見つめるだけだ

「早紀、最近窓の外ばかり見てない？何かあるの？」

「いや、別に・・・」

昼休みに亜希子が声をかけてきた。確かに、私は窓の外を見すぎている。いつか彼にもばれるかもしれない。私から彼が見えるということは、彼からも私が見えるはずなのだ。しかも彼は、いつも窓の外を見ている

「亜希子、向こうの窓からって何が見えるのかな」

「え？う～ん・・・こっちの校舎しか見えないんじゃない？」

「そっか・・・何見てるんだろ」

「誰が？」

「ううん、なんでもない」

亜希子が怪訝な顔をしているのをスルーして私は再び窓に目を向ける。彼は教室にいないようだった

毎日、学校に来るのが楽しみなんだ。彼がそこにいると思うだけで。話したりとか、目が合ったりとかはしないけど、確実に週5回は顔を見れるのだ。英語の先生より顔をみる機会が多いってすごくない？別に、彼のことが好きってわけじゃない。いや、好きといえば好きなんだけど。顔も格別かっこいいわけじゃない。5メートルの距離でしか見たことないし、性格なんて知らないし。

でも、一度でいいから声を聞いてみたいな。背が高いから低いのかな。意外と高かったりして。どんな声で笑うんだろう。どんな声で囁くんだろう・・・

「早紀？どーしたの？にやにやして」

しまった。また顔が緩んでいたらしい。なんでこんなにも彼が気になるのか自分でも分からないただ、彼が何を見ているのか知りたいだけだ。視線は定まってるわけじゃない。上のほうを見て

いたり、下のほうを見ていたり、何を見ているって訳でもなさそうだった。ただ、外に目を向けているだけ。黒板見ろよ、黒板。と私は内心ツッコミを入れてみたりするのだけど、自分も人のことは言えない

なんとかして、こっちを見てもらいたい。金髪にしたら目立つかな。私服OKだったらめっちゃ派手な格好してくるのに。うちは校則が厳しくてそんなことできない。どうしたらいいんだろう

そんなとき、ついにチャンスがやってきた

「あれ？早紀どうしたの？バツサリじゃん！」

「うん、暑いからさ～切っちゃった」

髪を切った翌日、一時間目が始まる前。亜希子が私の席まで来て髪形を褒めてくれた朝の風が気持ちいい。この風をあの人も感じているのかしら、なんて思って窓の外を見たら、彼と目が合った。目が合うのは初めてだ。あまりに突然だったので、私はしばらく目を逸らせなくて

じっと彼と見つめあってしまった。それは永遠にも近い時間

「髪、切ったんだ！似合うね、短いのも」

よく通る大きな声で彼が言った。窓枠に両肘をかけてこっちを見てにこにこしている

「なに～？あの人、知り合い？」

亜希子が聞いてくるけど、私の耳には入らない。どうしよう、どうしよう。なんであの人私に声をかけてくるの？なんで髪切ったってわかるの？とにかく、とにかく返事をしなきゃ！

「ありがとう！！」

私の声も負けずに大きかった。周りのクラスの窓から何事かと覗く顔がいくつも見えたやっとな、彼の声が聞けた

始業を告げるチャイムが鳴って、彼は窓から体を離して教室の前へ目を向けてしまった私はしばらく放心状態で、授業なんてもちろん聞いてなかった

それからはときどき目が合うようになった。その度にドキドキして、学校に来るのが以前にも増して好きになった。彼が見ていたのはもしかして私なんじゃないかって自惚れたりして。あれから声は聞けてないけど、席替えをする前にもう一度聞けるかな。風に乗ってやってくる彼の声を。



## 『霞草』

---

いつからそこにあったのか、俺にはそれがわからないのだけど、いつのまにか教室の窓際に白い花が飾ってあった。花瓶にいけられたその花は、俺の知らない名前の花。透明な花瓶は日光を反射してきらきらと輝き、花は凜としてそこに佇んでいた

俺の席は一番窓際の前から3番目。その花から一番近い席だ。ほのかな花の香りが時々風によって俺の鼻をくすぐる。俺はなんだかそれが気に入って、誰が生けているかわからないその花を好きになった

花はいつも元気だった。一体誰が水を代えているのだろう。不思議に思って俺は友人の達也に聞いてみた

「この花って誰が持ってきたんだ？」

「いや、知らないな……。水を代えてるとこも見たことないし」

「そうか」

まあ、いいか。誰でもいい。とにかく俺はその誰かさんに感謝した。花のおかげで毎日少しだけ幸せな気持ちになれるから

ある日、部活を終えたあと教室に忘れ物を取りに行った俺はついに見てしまったあの花瓶を抱えた水野を。

「あ、水野だったんだ。その花もってきたの」

俺が水野に近づくと、水野は花瓶を元の場所に戻して俺の顔を見ずに教室を出て行ってしまった「……？」

俺は無視されたことに少しむっとしたが、大して気にも留めずに忘れていたノートをカバンに押し込んで帰宅した

水野は3年で初めて同じクラスになった女子だ。大人しくて、目立たない存在。色素の薄い肌と髪が余計に存在感をなくしている。今までほとんど話したことはなかった。俺は水野の下の名前を思い出すことができない。夕暮れの教室で花を抱える彼女はなんだか消えてしまいそうだった

あの花はなんという花なのか、明日聞いてみようか。まあ、機会があればだけど。

「この花、いつもきれいだよなーほんと、誰がもってきたんだろう」

次の日、俺と話していると達也が言った

俺は水野だよ、とは何故か言いたくなくて「誰だろうな」と言った

水野のことは、俺だけが知っていればいいと思った。その理由は自分でも分からない

「なあ、水野の下の名前ってなんだっけ」

「は？何、突然」

達也はいぶかしむように俺を見て、急ににやにやし始めた

「そっか。お前もついに好きな人ができたか。でも好きな女の名前も知らないなんて、ダメだぜ」

達也は勝手に話を進めている。俺は否定するのもめんどくさくて、達也から目を逸らして花に目を向けた。今日も綺麗だ、なんて思っていると、達也が「思い出した！」と言った

「何を？」

「だから、水野の下の名前。あいつ、女子からも水野さんって呼ばれてるからなかなか思い出せなかったんだけど、確か、霞だ」

「かすみ？」

「うん。そう。あ、この花、もしかして霞草じゃないか？」

「カスミソウ・・・」

「そうそう。あ、もしかして、この花を持ってきたの水野だったりしてな。自分と同じ名前の花を・・・」

俺と達也は教室の後方の席に座っている水野を見た。水野は俺たちの視線に気づくと、怪訝そうな顔をして顔をそむけてしまった

「俺、聞いてこようかな。水野に。これもってきたの水野かーって」

「いや、やめとけよ。違うかもしれないし」

俺は達也を引きとめた。その質問は俺がすでに昨日しているのだ。返事はもらえなかったけど。

俺は放課後、昨日と同じ時間に教室に行ってみた。そこには昨日と同じように水野がいた

「それ、霞草っていうの？」

俺はなるべく自然に、水野に近づいた

「・・・うん」

水野は下を向いたまま答えた

「ここ俺の席なんだけど、一番この花に近くて嬉しい。俺がこんなこと言うのも変だけど、ありがとう」

別に俺のために毎日水を代えてくれる訳ではないのに、俺はなんだか無性に感謝の意を伝えたくてそう言った。そしたら案の定、

「下田くんのためにやってるわけじゃないから」

と冷たく言われてしまった

「いや、それはそうなんだけどさ。でも、この花、水野と同じ名前だよな。雰囲気もなんだか似てるし」

そう言ったら、水野は顔を赤らめて

「に、似てないよ！」と言って俺を睨んだ

俺は褒めたつもりだったのに、どうやら水野を怒らせてしまったらしい

これだから女ってのはよくわからない

それからしばらく沈黙が続いて、俺は水野と一緒に帰ろうと誘った

断られるかと思ったけど彼女は小さな声で、いいよ、と言った

夕日を背に歩くと、二人の影が長く伸びた。今までろくに会話を交わしたことのなかった俺たちは、共通の話題も見つからず、ひたすら歩き続けた

「水野って意外と気が強いのかな。見た目的には本当、霞草って感じなのに」  
俺は水野の内面を知れて嬉しかったから言ったのに、水野はまた怒ってしまった

「下田くん、私がなんであの花を下田くんの近くに置いたかわかる？」

「え、たまたまじゃないの？」

「わかんないなら、いい」

「いや、わかった。あれだろ。自分と同じ名前の花を俺の横において、いつでも私を思い出してね、ってやつだろ」

俺は冗談半分に言ったのに、水野は驚きを隠せない表情で俺を見た

「ち、違うわよ、バカ！」

そう言って水野は走り去っていった

「なんだよ・・・マジだったのかよ・・・」

次の日学校に行ったらあの白い花はもうなかった

俺は水野に視線で問いかけると、彼女は白い紙を俺に渡してきた

その紙には放課後屋上に来て、と書いてあった

これはもう、あれだ。告白ってやつだ

俺は逸る気持ちを抑えて授業を受け、放課後になるとすぐに屋上へ向かった

屋上にはすでに水野がいて、手にはあの花をいけた花瓶を持っていた

「下田くん、私ね、転校するの」

「え？」

水野は唐突にそう言った。俺の期待していた展開とはだいぶ違ったので、俺は水野の言葉を理解するのに少し時間がかかった

「だから、この花は私の代わりに下田くんが育ててくれる？」

そう言って俺の前に突き出された花は、やっぱり水野に似ていて。

「・・・わかった」

花を受け取ると、水野は屋上を出て行った

次の日水野の別れの挨拶をクラス全員で聞いた。どこか遠いところへ行くそう。俺はそれがどこだったかもう思い出せない

俺にとって水野はその程度の存在で、好きでも嫌いでもなくて、だけど、この俺の横で風に揺れている白い花がいつまでも俺に彼女の存在を忘れさせないのだ

「せめて、この花が枯れるまでは私のこと忘れないで」

と水野が言っているような気がした。でも、俺は枯れても彼女のことを忘れはしないだろう

毎年夏が来るたびに、霞草は街中でその姿を現すのだから。